
このこねこのこ

加村由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このこねこのこ

【Nコード】

N2000J

【作者名】

加村由

【あらすじ】

異世界トリップしてネコになってしまった男の子と、その拾い主のお話。

1・ねじ、拾われる(1)

おれの家では猫を一匹飼っている。

灰色の虎模様の、ちよつとでつぶりしたきまぐれなオス猫で、おれが学校から帰ってくるとソファで丸くなっていたり、たまにおれが扉を開けるのを玄関で待っていたりする。

お腹が空いているのに餌皿に餌が入っていないと、わざわざおれのところまで来て「にゃあ」と鳴いて催促する。機嫌がいい時はごろごろと喉を鳴らしながら体を擦りつけてくるし、かと思えば首を掻いてやろうと伸ばした手に爪を立てられたこともある。

休みの日、父さんが畳に横になって新聞を読んでいると、ご丁寧に広がった新聞のど真ん中にきてごろりと横になる。母さんは最近、「ぎゅうにゅう」という言葉を覚えさせようと一人画策している。お陰で、うちのだれかが冷蔵庫の前に立つと尻尾を立てて近寄るようになった。

そんな姿を見ていると、猫ってなんて自由な生き物なんだろうと思う。特に、テスト期間中にたじたじになって帰宅したときや、マラソン大会の前日なんかには、目の前でのんびりあくびなんてされた日には、ちよつとした殺意すら湧く。

猫になれたらいいだろうなあ。猫になりたいなあ。本当に猫になつてしまつたら、発売日にマンガを買いに行くことも、友達と海やスキーに遊びに行くこともできなくなることもなんか棚に上げて、真剣にそう思う。

だから、というわけではないだろうと信じたい。それとこれとは無関係であるとは是が非でも信じたい。そうじゃなきゃ、おれは過去に遡って、一瞬でも「猫になりたい」と思ったあの時とその時とこの時の自分をぶん殴ってこなきゃいけない。

だから、でも、じゃあ一体どうしてこんなことになったんだ？

*

雨がさあさあと降っていた。

「な、……んだこれ」

昨日は晴れだった。今日寝る前に見たテレビの天気予報のお姉さんも、「今週はずっと晴れの日が続くでしょう」と言っていた。

いや、そんなことはどうでもいいんだ。たまたま天気予報が大外れして、まあ満月がこうこうと昇って行くところを夕方この目ではつきり見たわけですが、それでも突然雨雲が押し寄せて大雨になる日だって、たまにはそんなこともあるだろう。

問題はそれ以前。

なんでおれは雨の中、夜にもかかわらず、外で一人突っ立っているんだ、ということ。

確かに昨夜、テレビを見た後二階の自分の部屋に行って、明日友達に返す約束をしていたマンガをちゃんと机の脇に用意して、ベッドに入って眠りについたはずなだけだ。

おれには夢遊病の気でもあったのだろうか。ここが家の庭というならまだしも、見たことも聞いたこともないような場所で一人突っ立っているこの状況、自分を誤魔化すこともできない。そうだ、明日病院行こう。精神科。心療内科？ どっちだろう。

まあ、そう決意したとしても、ここがどこだか分らないのでは帰りようもないんだけど。

見知らぬ場所で、一人きりだ。しかも、夜。

自覚したとたん、体がずんと重くなったような気がした。それは気のせいではなく、たぶん着ていたパジャマ代わりのスウェットが水を吸って重くなったせい。

いつそ夢なんじゃないかとも思うが、濡れた布が肌に張り付く不快さも、むき出しの顔や首に落ちる雨粒の痛さも、裸足の足の裏と地面との間を通る水の冷たさも、全部がこれがリアルだと言ってい

るようなものだ。

とりあえずは、雨宿りだ。このままでは風邪をひく。もう遅いかもしれないけど。

そう思つて、どこか雨除けになるような場所はないかとぐるりとあたりを見回した。

そこは、閑静な住宅街に家があるおれでもちよつと戸惑つてしまふくらいに、静かだった。雨の音しか聞こえない。天気が天気なせいか、歩いている人は一人もいなかった。まさにこの場に一人きり。明かりも、街灯らしきものはどこにも見当たらず、少し離れた場所にある家々から洩れる頼りない明かりが唯一の光源だ。

そんな不確かな光しかないわりに、視界は妙にクリアだった。薄暗くはあるが、結構遠くまで見渡せる。ぐるりと首を巡らせて見るに、どうやらここは広場のようにつけた場所らしい。

背中ので、雨が水に降り注ぐような音がして、振り返つてみればなんとそこには噴水があつた。今は水が出ていないその噴水は、まさに広場の中央に設置されたもののなのだろう。

なんでこんな場所にいるんだ、なんてことは、今はなるべく考えないようにする。

足元は石畳になつていようだった。一步踏み出したおれの足の裏には、固いがまるやかな石の感触が伝わってくる。

ぴちゃぴちゃと水音を立てながら、おれはとりあえず、広場を囲むようにして立つていゝ家々を目指した。

なんだか外国の家のような、ちよつとカントリー調の、同じタイプの家ばかりが規則正しく建つていゝ。きつとそういうコンセプトのニュータウンかなんだらう。

三段くらいの小さな階段の先に玄関ドア。どの家もドアを広場の方に向けていゝ。みんな同じ色形をした家だったが、ドアの色だけは様々だった。緑に青に、黄色に赤。どれもちよつとくすんだ色をしていゝ、結構日や雨にさらされて使ひ込まれていゝんだなあと思ふ。夜なのにそんなところまでわかつちやうおれつてすくくない？

ちなみに視力は両目とも2・0。

さて、選り取りみどりのこの状況だが、そのどれかを選んで中に入れてもらうのは、ちよつと気が引けた。夜更けにびしょびしょの小僧が訪ねてこられても、きつとみんな困るだろう……というのは実は建前で、おれは人見知りなんだ。ただでさえ知らない人と話すのは苦手だつていうのに、こんな状況はなおさら気まずい。

幸い春先にしては温かい今夜の気温のおかげで、一晩外で過ごしても死ぬなんてことはない、はず。風邪くらいはひくかもしれないけれど、それくらいならなかななる。

そう判断して、おれは家と家の間の細い路地のようになっている場所で、夜が明けるのを、または雨がやむのを、待つことにした。究極の選択で間違つた方を選んでいく気がするけれど、チキンと呼びたければ呼べ。

と、今宵の宿を星空　じゃなかった、雨雲の下と決めたはいいものの、やっぱり雨に降られた格好のままでは肌寒い。スウェットの中までびしょ濡れだから、一枚脱いだくらいではどうしようもない。

仕方なしに、服の端からだんだんに絞ってゆくことにする。幸い化学繊維のおかげで水はけはいい感じた。

ぎゅつと絞つて、次。ぎゅつと絞つて、また次。

ぴちよん、ぴちよんと水が地面に落ちる音がやけに耳についた。

きつとそれだけ静かだつていうことなんだろう。なにせ、ここは車が通る音ひとつしない。現代日本つて案外静かだったんだなあ。

あらかた絞り終えた後は、冷たく濡れた地面に座り込むのもいやで、壁に立て掛けてあつた板の切れ端をちよつと拝借して地面に敷き、その上に座ることにした。それにしてもダンボールの一つくらい置いてありそうな場所に、なぜ板が。しかもベニヤじゃなくて一本の木をスライスしたような木目の板。捨てるんだつたらちよつと欲しいかもしれない。

小・中と慣れ親しんだ体育座りで、おれはひたすら雨音を聞いていた。眠気は訪れなかった。このまま寝たらひよつとして死にはしないけど、うん、しないだろうけど、雪山の例（「寝るな！寝たら死ぬぞ！」というあれ）もあることだし、逆に眼が冴えてしょうがない。

ちよん、ぴちよん、ちよん。規則正しい音の合間に、異物が紛れ込んだのに気がついたのは、どれくらい時間が経った頃だろうか。こつ、こつ、こつ、と、それは雨音同様規則正しかったが、明らかにそれとは違い、何か固いもの同士がぶつかる音だった。つまりは、靴が石畳を踏む音。

残業帰りのお父さんだろうか。それとも飲み会の後の女子大生？どちらにしろ、こんな場所でうずくまっているおれは不審者に違いない。見つからないようにと願いを込めながら、体を小さくするいや、まてよ。もしかして、不審者だろうがなんだろうが見つかってしまつて、警察に連れて行ってもらえれば家に帰れるのでは？そのことに思い至つたのと、不意に足音がとまったのは、ほとんど同時だった。

傘が雨をはじく音が、すぐ近くでした。

路地に入りこんだおれには光など届くはずもなく、真つ暗なはずの場所で、でも確かにおれはそのひとの顔を見上げていた。

やたらと美形な、金髪の男の顔を。

1・ねじ、拾われる(2)

暗闇の中で、確におれとそのひとは互いに互いの顔を見つめあっていた……んだと思う。いや、向こうはこっちの顔なんて見えていなかったのかもしれない。眼鏡を忘れた近眼の人が遠くの黒板の文字を必死に読み取っているみたいな顔をしていた。美形でもそういう表情をするらしい。

おれは気配を消そうと極限まで体を縮めたコンパクト体育座りで、暫くぴくりとも動けなかった。体は動かなかったが、反対に脳みそはフル回転だ。

染めたり脱色したりではない、天然モノの金髪を短めに刈り込んだ、若い男。そのときのおれには、彼の瞳がびーだまみたいに透明なグリーンをしていることまでなぜだかはつきり見て取ることができた。でも、そこで引っ掛かってる場合ではない。

なんだこれ、なにこのひと、なんでこのひと。

ガイジン？

古式ゆかしいタイプの電子レンジが鳴る音が、頭の中で響いた気がした。ちなみに、木魚とお鈴の音でも代替可能。ぽく、ぽく、ぽく、ぽく、ちーん。

と同時に状況を理解したおれは、脇目も振らず一目散にそのひとのいない方、つまり路地の奥に向かって転げるように駆けだしていった。

(ガイジン？ 英語むり！ ていうかガイジン！)

そりゃあおれだって、中学3年間プラス高校入学から丸1年、真面目に英語教育を受けてきたわけですけども！ ただでさえ人見知りなんだ、いきなり外国人と実践マンツーマン英会話をするには、少しばかり心の準備期間が足りない！

「おい！」

雨音とおれ自身の足音にまぎれて、後ろで慌てたような声が聞こえた気がした。だけど構っている暇はない。床に敷いていた板きれが逃げるとき足に引っかけたてバンツ、と大きな音を立てた。自分で立てたその音にビビりながら、おれは無我夢中で路地の奥を目指す。

せっかく絞った服が元のとおりびしゃびしゃだ。

止む気配のない雨の中を、おれは一人歩いていった。

(どこだよ……ここ)

あの噴水広場から、あの細い路地から、いったいどれだけ離れたんだろう。でも、それがわかったとしても実は何の解決にもならない。

むしろあの噴水広場がいったいどこだったのかが知りたい。悪いけど近場であんなニュータウン、聞いたことないぞ。あんな、外国映画のセットかテーマパークみたいない……ってもしかしてもしかするとここは夢と魔法の国か？ いやいやいや、家から徒歩で行ける距離じゃないから。まさか夢遊病で電車やらバスやらに乗るなんて高度なことをおれはしてのけてしまったのか！？

ずいぶん歩いた気がするが、行けども行けども街灯はなく、地面は依然石畳。道の両側に建ち並ぶ家々はやっぱりカントリー風のレンガ造り。人の気配もナッシング。いやまあ、夜だから仕方ないか。来た道を振り返るが、もうどこをどう歩いたかすら記憶にない。

よしんば道を覚えていたとしても、あそこに戻る気もないけど。

「なんかもう……疲れた」

あの場所から逃げるときに板に引っ掛けたせいで、右足の甲の皮膚が破れたみたいにしりしりずきずきする。歩くたびに傷がひきつれて、ほとんど片足をひきずっている状態だ。傷がどの程度のものかは、あんまり見たくない……見てもどうしようもないし。

その傷のせいもあって歩くのに嫌気がさしてきたせいか、体が急に思い出したみたいに眠気がやってくる。首を振って睡魔から逃れ

ようとするけど、だめだ、眠い。雨が降っていなければそのまま場所なんて気にせず眠ってしまいそうだ。

そんなとき、丁度目についたのが歩道と車道を分けるかのように作られている生垣だった。大きな木が生えていて、雨をしのぐにはちょうど良さそうだし、生垣自体も枝葉がまばらなせいで容易に下に潜り込めるだろう。お誂え向けに、地面はむき出しの土ではなく芝生だった。

もうここでもいいや。

四つん這いになってもそもそと生垣の下に潜る。やっぱり、予想した通りに雨から逃れられた。芝生は濡れているけど、石畳より冷たくない。

（服、濡れたままだけど……）

眠い、寝る。

自分の体温をかきあつめるように、おれは体を丸くしてすっと眠りに落ちた。

光が瞼の裏に射した気がして、自然と目が覚めた。

一瞬状況が分からなかった。なんで土の匂いのする場所で寝てるのかとか、体を動かすたびにちくちく当たるのはなんだろうとか、なんで服が湿ってるのとか。

目だけ開けて微動だにせず記憶を掘り出すと、だんだん頭が機能してきた。そうだ、昨日は。

生垣の下から這い出てみると、雨は上がっていた。

泥のように眠っていたと思う。それこそ休みの日に一日中寝ていた時みたいに頭が重い。けど実際はそんなでもなかったのか、朝日は今まさに地平線から顔を出したところのようだ。洗いたての空気が朝日の下できらきらと光っている。早朝すぎるせいなのか、通りにはおれ以外人影はなかった。

体が錆びついたブリキのおもちゃのようにみしみしっている。きつと変な体勢で寝たからに違いない。

起き上がる前に四つん這いのまま、ぐうつとストレッチする。あ、今背骨が鳴った。

背を伸ばしていると、ちょうどおれが寝ていた生垣の向こうから歩いてきていた野良猫が、おれを見てちよつとびっくりしたみたい

に立ち止まってから、そそくさと歩き去っていった。

おお、第一村民発見。あ、いや、第一村民は昨日のあの男か……。人間より猫の方が話しやすいのに、なんて考えているおれは人間失格か？

「イテ」

ずきんと足が痛んで、ストレッチをやめ胡坐をかいて、右足を引き寄せた。

「うわあ、きもい」

足の甲に、真一文字に引つ掻き傷、その周辺には板にぶち当てた衝撃で内出血したのか、青痣ができています。血はもう止まっているが、ここらへん結構血管があるから、流血沙汰だったんだろうなあ。やっぱり昨日は見ないでおいでよかった。

その時、ぴちゅんと頭の上に水滴が落ちた。

「ひゃっ」

なんだよ、と上を見上げると、張りだした木の枝の先の葉から昨日の雨の名残が落ちたらしい。そういつている間にもう一滴、ぴちゅん、と

「わ……えっ？」

頭の上に落ちたと思ったのに、濡れた雨粒の感触は耳に届いた。

瞬間的にぴるつと耳を動かして水を払う。……ってあの、動かす

って、おれ耳動かせない人なんですけど！

両手を顔のサイドにもっていく。

あれっ。耳ってここじゃなかったっけ？　なんか、手になんにも

触れないんですけど……。

さわさわと自分の髪の毛をかき分けて、あるべきものを探す。ない。

ぴちゅん。

びるっ。

おれは恐る恐る、今また水滴の感覚のあった場所　頭の上に手
を持っていく。

もふり、と、触ったことのない感触がした。いや、実は触ったこ
とがある。結構触ったことがある……ただしそれはおれのじゃない。
少し離れた場所に、朝日を弾いて鏡のようにきらりと光っている
水たまりを見つけて、おれは変な風に跳ねる心臓を宥めながらそこ
へ歩いた。

そつと覗きこむ。

あ、頭の上に葉っぱが　じゃなくて。

おれの視線に反応するように、そいつはぴよこりと動いてみせた。

「な、な、な」

どこからどうみても、それはいわゆる、猫耳ってやつで。

「にゃにーっ!？」

1・ねじ、拾われる(3)

驚きすぎて、うつかり猫っぽい喋り方しちゃったじゃないか！

猫っぽいって、そもそも猫は喋ったりしないわけなんだけれども。

いやいや、そんなことより。

いつから？ どうして？ っていうか、どうやって？

現代科学で説明可能な現象なのかこれ！

おれは水たまりに自分を映しながら呆然自失のまま、ひたすらもふもふとそいつを触っていた。気持ちいい。じゃなくて。

一見髪とまぎれてしまうような、真つ黒い色の毛並み。ちなみに短毛種。どうでもいいか。

触り心地は実際、家の猫より気持ちよかった。最高級のファーミtainな滑らかさだ。

「……夢か？」

あんな特殊な状況に突然放り出された昨夜ですらやらなかったことを今さらやってみる。つまり、ほつぺをむにとやる、定番のあれだ。うん、痛い。それ以前に未だ足がずきずきと痛いことに気が付こう、おれ。

昨日の夜は、おれは多分、まだ信じていなかったんだ。

夜闇というベールがめくらましになって、どこかでこれは現実ではない気がしていた。お化け屋敷に入っている時みたいに、こんな現実離れた非日常は、きつと限定的なものなんだと思い込んでいた。

だけど、ベールは払われた。

鳥が空を飛んでいる。電線も、電柱も、鉄塔もない広い空を。

昨日は見えなかったものが、今のおれには見える。

おとぎ話みたいな街のむこうにそびえるのは、高層ビルでも東京

タワーでもなくて、まるで中世ヨーロッパみたいなお城だった。

*

おれは右足を引きずりながら、またもや歩いていた。

現代日本の男子高校生の運動量を舐めるなよ。ハッキリ言って既に足が棒のようだ。ちなみにおれ、中高と帰宅部でした。

なんだかなー、思いだしてみるにおれは昨日から歩いてばかりいる気がする。

突然だけど、たとえば旅行なんかで訪れた見知らぬ街で道に迷った時。バス停があるはずんだけど行けども行けども見当たらない、なんて時。そんなとき、おれはなかなか立ち止まらないタイプだ。

人見知りのおれじゃ通行人に道を聞くのも一苦労だし、地図引張り出すなんてもつてのほか。かといって立ち止まったり突然引き返したり、そういうのもなんだか不審者っぽくて、ためらってしまふ。自覚はなかったんだけど、たぶんおれは人一倍見栄張りなんだ。引き返すにしても、わざわざ無意味に道を渡ったり、適当な小道で右折を三回繰り返したりして直進のまま引き返す。それなんていう一方通行？

「おい！ 危ないだろ！ちゃんと前見て歩けチビ！」

「すみません……」

ずっと下ばかり見て歩いていたせいで、だれかとぶつかってしまったようだ。よろけた体が地面に倒れそうになるのをかるうじとどめ、ぼそぼそと謝っているうちに、そいつはさっさと行ってしまった。

……チビって言われた。身長170cm弱のおれをよくもなんてね。ごめん嘘つきました、小数点以下四捨五入で164cmです。最近の発育のよろしいクラスの女子たちにすら抜かされて、男女混合の背の順でも前から数えたほうが断然早いです。

だからといって、自分自身の力ではどうにもならない身体的特徴

を指摘するのはどうかと思うよ！ と、普段のおれなら言う。でも今回だけは言い返せない。おれが人見知り体質だからとか、そういうんじゃないんだ。それもあるけど。

俺の脇を、小学生くらいのガキが追いかけてっこをしながら走り抜けてゆく。お前ら学校はどうした、学校は。

ぎゃあぎゃああと騒がしいそいつらの身長は、どう低めに見積もっても俺と同じかそれより上。

通りを歩く美人のお姉さん、180cm。立ち話の奥さん、180cm。新聞屋のおじちゃん、190cm。大工のお兄ちゃん、200cm。

みんな背、高くな？

*

水たまりの前で、モン・サン＝ミシエルがサグラダ・ファミリアみたいな　ってどっちも城じゃなくて大聖堂だったっけ。まあいいや。とにかく、巨大な城（仮）を見上げてぼっと突っ立っていたおれは、通りの反対でした「ガタン」という音で意識を取り戻した。ドアが開く音だ。街の住人が起き出したんだ！

おれは咄嗟に上に着ていたトレーナーのフードを目深にかぶった。こうすればこの人知を超えた耳は見つからない。

それから、なるべく不自然でないように、さもこの街の人ですー、早朝散歩が日課なんですー、という感じを心がけて道を歩き出した。どこに向かっているのかなんて、そんなのおれが知るわけないだろ。

歩き出す間際、ドアから出てきた人影のほうを横目でうかがう。目の端に捉えた姿形に、おれはこっそり失望してすぐに視線を戻した。

家から出てきたのは、足首まで隠れるような長さのスカートをはいた女性だった。使いこまれたエプロンをつけていて、結上げた髪は金髪、手には箒をもっている。

いやいや、まだ一人目だから。おれは気を取り出して歩き出した。街は本格的に目を覚まし始めたらしい。歩いていると両脇の家々のドアが次々と開く。その度にびくりと肩が跳ねるのはしょうがない。いっとういう理由で呼び止められるか分からないのだから。

ドアから出てくるのは、男性、女性、老人から子供まで、様々だったが、みな一様に同じことが言えた。

金髪、茶髪、赤毛、白髪、アッシュ、プラチナブロンド……。みんな派手な色の髪に、堀の深い顔立ち。

「おはようジュディーさん、昨日はすごい雨だったねえ」

「おはようございます、リンジーの奥さん。でもおかげで今朝は空気が清々しいわ」

どこことなくアメリカンな名前。でもしゃべってるのは日本語。

「おっと、今朝はリナが取りに来たのかい？ おうちのお手伝いして、いい子だな！」

「ふふ、ありがとボルノ兄ちゃん。牛乳二本くださいな」

牛乳や新聞の配達はバイクでも自転車でもなく、みな徒歩。

「おい、こいつは王城までいくかね」

「なに言ってるんだ爺さん。これは南の陶器街行きだよ。王城行きは反対だ」

ガラガラと音を立てて走るのは、二頭立ての乗合馬車。

それに付け加えて、みんなのこの背丈。いくらおれが164cmだからって、そんな奇異の目で見られるほどの低身長じゃないだろ！？ うん、この格好を指して不審だと思ってるならそれは弁解できないけれども。

とうとうおれは認めることにした。

こりゃあどうも、俺の知ってる世界じゃなさそうだ。

何の因果か、おれは巨人の街（外国仕様）にいるらしい。

これなら猫耳の一匹二匹いてもおかしくないだろう、と種々の理解困難なもろもろをさておいて、そんなことも思っただが、残念な

ことに見当たらないんだ、これが。

いい加減足も限界だ。右足の感覚がなくなってきた。ていうかおれ、裸足なんだよね。いくら整備の行き届いた石畳とはいえ、細かな砂利や小石が足の裏に当たって、無事な左足も痛い。

さつきから寒気がしてしょうがない。一晩外で濡れた服を着て寝た代償だろう、馬鹿はひかないというあれだ。わーい、おれ、馬鹿じゃなかった。無理やりにもテンション上げてかないとうっかり倒れてしまいそうだ。

傍目におれはどう見えてるんだろうな。顔を隠して下を向いて、びしょ濡れの服を着て、足を引きずりながら歩いているチビ。

うわあ。想像してその不審者具合に泣きたくなった。テンションただ下がり。

「止まれ」

まさにおれと同じ感想を抱いた人がいたんだろうか。おれはこれ以上ないというほどにビクツと肩を尖らせて、フードの下からあたりを窺った。

目の前に誰かの足が見える。このままいけばぶつかるところだった。どうやらその人がおれに声をかけたらしい。

「ごめんなさい」

さつきと同じで、小声で謝ってその横を通り過ぎようとする。

「止まれと言っているだろう!」

「ひッ」

なのに再び呼びとめられて、しかも道をふさぐように回り込まれた。

おれは恐る恐る、もう少しだけ頭をあげる。

遠巻きにみんながおれのことを見ている。こんなに注目されたのは幼稚園のおゆうぎ発表会以来に違いない。

おれの前に立つ人の両脇には、レンガでできた頑丈そうな壁があった。壁？

思いきって、ずっと視線を上に移動させる。

茶色の壁は両側のずっと奥までつながっていた。おれの前だけ壁がない。というより、これは門か？

「王城に何用だ、子供」

王城？ 王城ってつまり……城？

無心で歩いていたのに、おれはどうやら遠目に見えたあのお城まで歩いてきてしまったらしい。

どうやってこの状況を切り抜けようかと視線をまた下に戻す途中、おれを問い詰める男の顔が目に入った。おれはそいつを目にしたとたん、「それ」から視線を動かせなくなった。

清潔そうな茶色の髪の間髪に、見えたのだ。

「犬耳だ！」

1・ねじ、拾われる(4)

彼の髪よりちよつと薄目の、金茶色をしたそれは、確かに耳だった。へなつと垂れた、ゴールデン・レトリバーの耳に似ている。

彼は木の実みたいな色と形をした目を真ん丸に開いて、おれを見下ろしていた。手には槍らしき武器をもっていてちよつと怖そうなんだが、その子供みたいな目と冗談みたいな犬耳が雰囲気のを和らげていた。

ちなみに彼も例にもれず、身長190cmオーバーだ。下手すりゃ2メートル越えもあるかもしれない。

身長という壁を乗り越えて、だがしかし、おれとお前は固い絆で結ばれている！ 猫耳犬耳という身体的特徴で！

そのときのおれはそう信じて疑わなかった。

「あの！」

彼が何か言いたそうに口を開きかけたそれより先に、おれは声をかけた。

同時に、ぱさりと湿ったフードを頭から外す。ぴこりと顔を出す、おれの猫耳。

彼の目がさらにまん丸くなった。

「あの、おれ」

何て言おう。道に迷いました？ 突然耳が生えてきたんです？

どうやったらそんなに大きくなれるんですか？

言うべきことはたくさんあったが、何を言っているのかわからなかった。どれを言ったとしても、頭を疑われるんじゃないかと思つて。

あうあうと口を動かしているうちに、犬耳な彼は我を取り戻したみたいだ。

そして、何を言うでもなく、迅速な動作で懷から何かを取り出し、口にくわえ、

ピイイイ！！

そこから、脳天をつんざくような音が発せられた。あれは笛だったんだ。一拍遅れて気付く。

「君！」

槍を持つ手とは逆の手がおれの目の前に迫る。笛の音を聞きつけて、門の奥からたくさんの足音がする。

根拠なんかないけれど、こういつときどうするかって、きっと誰であつても大差ないと思うんだ！

おれは疲れた足も傷も、ふらつく体のこともこの時ばかりは忘れて、さつと身を翻した。

逃げる！！

*

自慢じゃないがおれは運動音痴だ。体育の成績は可もなく不可もなくの3、徒競走だつてマラソンだつて、いつもビリか最後の方。それなのにおれはうまく追手を振り切つたみたいだった。細い路地や草の茂つた空き地を突つ切つたのが勝因だろう。おかげで手足に細かい切り傷や擦り傷ができたが、それもこの勝利の勲章ってことにしておく。

おれは今、公園の池の周りにある生垣に身を潜めている。公園、だろう、たぶん……。池と芝生と木と小道がある。遊具はないし、住宅街にある公園みたいに狭いけど。

正直、どうして追われることになったのかさっぱり分からない。おれ、なにか悪いことしたっけ。それとも、犬耳は許されても猫耳は許されないのか？

長い追いかけてこのせいで、日はいつの間にか南中に達していた。ぎゅるぎゅるとお腹が鳴る。腹減った。

いつまでこんな場所に隠れていなきゃいけないんだろう。できればどこかでごはん食べたい。……お金ないけど。誰か恵んでくれな
いかな。

いずれにせよ、ここにも食べ物落ちてくることはない。ち
よつと場所を移動しようと顔を生垣から覗かせたちょうどその時、

「いたか！」

「いや、見つからない」

「くそ……北地区の連中にも知らせろ、もうこの辺りにはいないの
かもしれない」

「ネコだけあつて逃げ足が速いからな……」

姿形は見えないけれど、声はそれほど遠くない場所で聞こえた。
危ない危ない。すぐに頭をひっこめたから幸いおれは気づかれな
かったようで、兵隊さんたちの状況報告だけが耳に届く。

猫だけあつて、つてねえ。おれは人間だっつーの。なんかへんて
こな耳は生えてきましたけれども、それでも16年と3ヶ月、人間
として精一杯生きてきたんだい。

しかし、彼らがまだまだおれを探すのを諦めていないことは明ら
かになった。どうする、危険を顧みず場所を移すか？ まだここ
にとどまるか。

逡巡していると、目の前の風景がぐらりとぶれた。

ああ、もう限界だ、目が回る。腹が空いて……じゃない、頭が痛
い。

このまま見つからないのと、見つかつて温かい食べ物を恵んでも
らうのと、どっちがいいのかちょっと考えた。それは最後の手
段だ。もうちょっとがんばろう。

……がんばっても誰も助けてくれないのに？

ここにおれを知っているやつなんていないぞ。

猫耳なんてへんなもんが生えちまったお前を、誰が助けてくれる
んだ？

弱気な考えが脳裏をかすめる。だめだ、だめだ。腹が減って、体

調は最悪で、体中傷だらけで。なにもかもがネガティブな方向へ向かう。

そんな時だった。

耳元で、再び音がした。

ガサリ。

おれは反射的に半身を起して、耳をそばだてる。そうしている間にも、ガサガサという音とハッハッハッ、という細かい呼吸音が近づいてきて

「わん！」

「わあああああああ！？」

ずぼつ、と生垣に突然頭を突っ込んできたそいつは、おれの顔を見てうれしそうに一声吠えた。

犬耳！　じゃない、犬！！

見つかった！　つーかでかい！　おれの頭をぱくりと丸呑みできちゃいそうな顔面サイズ！　この国は人間だけじゃなくて犬もでかいのか！？　おまえ、おれ、食うもの、食われるものの関係じゃないかこれ！

命の危険を感じたおれは、一目散にそこから飛び出した。

そのまま駆け出す予定だったおれの体は、横から伸びてきた手に脇の下を支えられ、いとも簡単にひょいと宙に浮く。

気持ちだけは100メートル走スタートしていたおれは、そのままじたばたと手足を動かすが、一歩も前に進んでいないことに気がついてはたと立ち止まる。立ち止まるというか、動きを止めただけだけ。

「ようやく見つけた」

もういちいち体を硬直させるのも疲れたよ、パトラッシュ。でもそうせずにはいられないこの状況。おれを持ち上げた男もそれがわかったのか、子供抱きに持ち替えてばんぽんとおれの頭を撫でてくる。いや、おれ、そこまで子供でもないんですけどね。

抱きかかえられることで接触した体の半分が、ぽつと温くなる。

「よくもまあ近衛隊と警備隊の包囲網から抜け出せたもんだ。草藪を通つたろ、あれがよかったんだ。匂いが消えた。それに、雨あがりなのも味方についた。水の匂いは鼻を紛らわすから」

そう言つて頬笑んだそいつは、おれも見知つた顔だった。

「……なんで」

短い金色の髪。びーだまみたいなグリーンアイ。ハリウッド映画にでも出てそうなとびっきりの美形。

「探したよ子猫ちゃん。急に逃げるし、血が点々と落ちてたし。まあそのおかげで見つけられたんだけど」

まるで同意するように足元で犬が鳴いた。改めてちゃんと見ると、名犬ラッシーみたいな、頭のよさそうな犬だ。

おれはくらくらする頭でわんこに手を伸ばそうとして、体勢を崩して抱え直される。

「大丈夫か」

最初から、日本語喋れるつてわかつてたらなあ。ここが巨大外人ばかりの街だつて、わかつてたら。

わかつてたら、おれはあの時、逃げなかっただろうか。

それを考えなかったわけじゃない。歩いている間、実はちよつと後悔したりもした。

「なあ、お前」

緑の瞳がおれを捕らえた。普段のおれなら委縮する要因にしかないガイジンの瞳に、今のおれはなぜか安堵すら感じていた。

「うちの子になるか？」

ああ、あつたかい。おれは彼の言葉が俺に向けられた質問の形になつていることに気がつかないで、温かい体温を求めるようにすり寄つた。

だつて、もう、いろいろ限界だ。

その仕草に男は笑つた。

ぽん、と再び頭を触られる。

「お前、名前は？」

「……鈴鹿倫」
すずかりん

「リン、いい名前だ」

それっきり、瞼はもうどうやっても開けていることができなくな
って。

ちゅ、と鼻の頭になにか湿った暖かいものが触れた気がしたけれ
ど、気のせいかもしれない。

*

それからどうなったかというところ、三日三晩寝込んだおれは、結局
そいつ エドの家に厄介になっている。

目覚めた場所は彼の家。おれと彼が初めて会ったあの路地があい
つの家の脇だったのには驚かないけど、おれがナーナ（エドの飼っ
ているあのコリーの名前だ。ちなみにメス）に発見された、あの場
所まであいつの庭だったなんておまけ付きには驚いた。そういえば
板塀の下をくぐった気もする。ちょうど子供が一人抜けられるくら
いの穴が開いていて、おれが雨除け下敷きにしていた板はその修理
用だったとか。

そのことを指して、エドは「リンが俺の家に来るのは運命だった
んだよ」とかふざけたことを抜かすけど、そんなのはただの偶然か
なにかだ。そうに違いない。

おれが寝込んでいる間に、彼の家の子には「猫飼ってます」のシ
ール、通称「猫シール」が貼られた。いや、犬って書いてあるシー
ルは見たことあるけど、猫にもあんなのかよ！

っていうかさ、そもそもおれ、猫じゃないから！
おれ、人間だからな！？

1・ねこ、拾われる 了

2・ねじ、餌付けされる(1)

それはおれがまだ小学生の頃、雨も降りしきる6月のことだった。ご多分に漏れずその日も雨で、おれは傘に当たる雨粒の音をBGMに足元の水たまりを避けながら一人で通学路を帰っていた。買ったばかりのオニユウの長靴をむざむざ汚すのは忍びなく、道路の凹凸を慎重に読み分けて歩かなければならない。

次の水たまり迂回ルートを決定して一步を進めようとして、おれはふと足を止めた。

ちょうどゴミ捨て場の脇を通るところで、くるりと首を廻らしても視界に映ったのはルール違反のダンボール箱くらい、あとは特別妙なものはない。一体何が気にかかったのか、自分でもよくわからなかった。

にしても、小学生ですら夕方にゴミ出ししちやいけないことと、今日が資源ゴミの日でないことを理解しているというのに。

「あと、ダンボール箱は畳んで捨てなきゃだめ」

だがおれがそれをする義理はない。気のせいだったかと再び歩き出そうとした足が、再び止まる。

「にゃーあ」

ゴミだと思ったダンボール箱の中に、猫がいた。

びしょびしょに濡れた箱、敷かれた新聞紙、その真ん中で今にも消え入りそうな声で。

灰色に黒い虎模様の入った子猫は、濡れそぼった毛がべったりと張り付いたぶさいくな顔で、おれを見上げて必死に鳴いていた。

その時幼いおれの心によぎったものを、おれはもう覚えてはいない。

一体何を思っただらうな。雨の中こんな場所に生き物を捨てた人に対する怒り？ 簡単に命を捨てられることに対する呆れ？ そ

れとも、小さな子猫を憐れんだらうか。

おれは段ボールの上に傘を差し出す。その分肩や背中が濡れたけど、気にならなかった。

しゃがみ込むと、子猫は自分の状況が分かっているのかいないのか、鳴くのをやめてくりくりとした目でおれを見つめる。どんなにかわいこぶつても、びしょ濡れだからやっぱりぶさいくだった。

「おまえ、うちの子になるか？」

手を伸ばすと、そいつは濡れた鼻面を押し付けて、場違いも甚だしいことにごろごろと喉を鳴らした。

「しょうがないなあ」

おれは子猫をそっと胸に抱き上げた。

*

体がまるで水の中にいるように緩慢にしか動かなかった。心なしか視界もぼやけている。

ああ、夢だ、と思った。

知らないベッドに寝ていたおれはゆっくりと体を起こす。

すぐそこに窓があつて、そこに映ったものにおれは確信した。

（やっぱり夢だ）

健全な男子高校生の頭に、ひどく滑稽なものがくつついている。

もしかしてと腰に手を回すと、その下から黒い尻尾が現れた。

はて、おれには変身願望でもあったんだらうか。ちよつと危ない感じた。秋葉原にはいったことないし、テレビで流れるちよつとアしな昨今の流行カフェに行きたいと思ったことなんて一度も……ないとは言いい切れない辺りが困る。

（別に困らないか、所詮は夢だし）

「リン」

いつの間にかベッドの脇にやたらと長身の男が立っていて、おれの名を呼ぶ。ひどく唐突な登場だが、これも夢だから、の一言で片

付いてしまっ。

父でもない、親戚の誰でも、学校の先生でもない。だれだろう、知らない男だ。

男は規格外にデカイ身長をしていて、顔を見上げるのに首を傾けるのだって一苦労だ。のたのたと顔を上げるおれをまるで阻むかのようなタイミングで、これも無闇に大きな手がすつと伸びてきて、おれの額から瞼までを覆った。

「下がないな」

柔らかい手ではなかった。皮膚が硬化して戻らなくなった、働く男の手だった。

冷たい手がそのまま頬をなぞり、するりと首のあたりを行ったり来たりする。

なにをしているんだろうと疑問に思わなかったわけじゃないが、ひんやりとした温度が気持ちよくて、おれは目を閉じされるがままにされていた。

ふと顎を持ち上げられ、撫でる手が止まったことを不服に感じたおれは目を開けようとし、また視界を阻まれた。何が起きたのかよくわからなかった。

口に何かを入れられる。舌で触ると痺れるような苦味が広がった。続いて、黒い影が近づいてきて覆いかぶさったかと思うと、唇をふさがれる。びっくりして固まっているうちに、今度は生温かい温度の水が口内に入り込んでくる。

視界いっぱい広がったそれが男の顔だと気がついたのは、影が離れてからだだった。

「まだ寝てなさい」

手が再び額から瞼を撫ぜ、肩に回り、優しく布団に倒される。導かれるままに、おれは深い眠りへと落ちてゆく。

次に目を覚ました時には、何もかもがクリアだった。

目を開けてまず目に入っただのは見知らぬ天井。

ん？ …… 見知らぬ？

がばつと体を起こす。

すぐ左手に窓があった。木枠の窓に、分厚いガラスが嵌っている。そこから見える景色よりもまず、そこに映る自分に目がいく。

デジャヴ？ なんだかとてもよく似た状況を覚えている。

両手を頭の上へ。すべすべのベルベットのさわり心地がおれの指を待っていた。

「……ふっ」

思わず笑っちゃうね、この状況。鏡代わりの窓ガラスに、すごく無理矢理感のある微妙な笑みを浮かべたおれが映っている。

ぱたん、と何か軽いものがベッドを叩く音がしてそちらを見やると、案の定そこに見えるのは真っ黒い尻尾。

寝起きの常で回転数の遅かった脳が、急激に活動を始める。

がしつと驚掴みにしたそれは、おれの気なんて知らずにぴるぴるとのん気に揺れていた。ああ、これがおれと全く関係ないものであったら、そんな様も頬笑み一つで流せたのに。

だけど、掴まれた感覚は確かに自分に伝わっているわけで。

（夢だけど、夢じゃなかった！ いや、夢じゃなかった！ 全部！）

ぎゅうつと尻尾を掴む手に力が入る。尻の先 ってのもおかしい表現だけれど、そうとしか言いようがない から鈍い痛みが駆け上ってきて、慌てて手を離す。

おれはそつとベッドを下りた。

それほど柔らかくないベッドだったが、高さだけはホテルのベッドよりもあって、つま先が辛うじて床に触れるくらいだった。

足には真っ白い包帯が巻いてある。体重をかけると、僅かに足の裏が痛んだが歩けないほどではなかった。

包帯もそうだが、この服。おれのスウェットはどこへ行ってしまったんだろ。綿100%って感じの生成り色の上下は、おれには少し大きすぎる。嘘。とても大きい。

上に着ているシャツは余裕で腿の下まであつたし、寝ているときは関係なかったが、立ち上がると今にもズボンが下がってきそうで、腰のあたりを手繰って常に手に持っていなければいけない。

尻尾は邪魔だったので、右足と一緒にズボンの中に入れた。十分ゆとりがあるので窮屈な感じはしない。

冷たい木目の床をそろそろと歩いて部屋を出る。部屋を出るとすぐ目の前に階段があつて、一段がやたらと大きいせいで慎重に降りなければならなかった。

階段を全部降りると、廊下にはいい匂いが漂っていた。

食べ物の匂いに、腹がきゅうつと鳴る。意のままにならない尻尾が、尻をぱたぱたと叩いた。

……お前らはもつと不安がれよな。どこだかもわからない場所に、今おれはいるんだから。

2・ねじ、餌付けされる(2)

廊下には扉が四つほど並んでいた。おれから見ても一番奥にあるのは玄関扉だろう。形が他のとは違う。

そこを目指す、という選択肢もありつつあったが、おれは腹と尻尾の要求を呑むことにした。匂いの元と思われる、一番近くの扉を開ける。

かなり気をつけたつもりだったが、きい、とか細かい音がした。くそつ、蝶番め。

細く開けた扉から少しだけ顔を出して中を窺う。

キッチンと思しき場所で、こちらに背を向けて、男が鍋をかき回していた。そのせいか、おれにはまだ気が付いていないのかもしれない。

生成りの開襟シャツに、青いエプロンをしている。なんだか鼻歌まで聞こえてくる。聞いたことのないメロディだ。

彼が鍋とまな板の間を交互に立ちまわる度、横顔があらわになった。

「……」

気がつかれていないのをいいことに、おれはじつくりと男を観察する。

こう言っちゃなんだが、エプロンが究極に似合っていない。キッチンなんていう場所も不似合いだ。

ハリウッド映画の主演として出てきそうなイケメンだった。ただし、恋愛ものじゃなくて戦闘メインのアクションもの。ガイジンの年齢ってよくわかんないけど、多分まだ若いはずだ。二十代前半くらいだろうか？ 仕事か恋かと聞かれて、迷わず仕事を取っちゃいそうな、ストイックな横顔。でもそういう主人公に限って、ミッシ

ヨンの途中に助けた女性と熱烈な恋に落ちたりするんだ。

それが、なにゆえ鼻歌を歌いながら料理なんて……

「起きたか」

おれは反射的に扉を閉めてしまった。

なんなんだ、ちゃんとこつちに気づいてたのか。

もう一度扉を開けると、彼はストイックなはずの顔をにこにこさせておれを手招いている。

「腹減ったろう、飯にするから座ってなさい」

目でキッチンの奥を示す。正方形のダイニングテーブルがちゃんと置いてあった。

早く料理に戻ればいいのに、彼はおれからなかなか目を離さない。緑の目が、あのビーダマの目が優しい色でおれを見つめている。

信頼して、いいのか。

きゅうつ。

……おれ的にはシリアスな場面だったのにな。自問自答のはずの問いかけにおれの腹が大きな声で返事をした。曰く、「いいともー！」ってね、お昼の番組じゃないんだから。

「もうできる」

男の声はいかにも「笑いたいのを必死でこらえています」といった声だった。くそう、いまさら引くに引けない。

おれはなんとなく部屋の壁ぎりぎりを伝うように歩いてテーブルについた。テーブルの真ん中には堅そうなパンが盛られた籠と、塩コショウの瓶が置いてあった。

男は相変わらず鼻歌を歌っている。おんなじ歌を何度も繰り返すせいでわかったことがある。あの人はちよつと音痴だ。おんなじはずのメロディが結構変わる。

「できたぞ」

二つの皿を持って男は向かいに座った。小さいほうの一つをおれの前に滑らせる。

真向かいにある端正な顔を見つめることは小心なおれにはちよつ

とできなかった。笑われて恥ずかしかったせいもある。

自然、視線の行き場所は目の前の皿になった。ほんのり色のついた透明なスープに、細かく切った野菜と鶏肉が入っている。表面に浮いた油が食欲を誘った。

ちらつと上目で彼のほうを見る。彼は微笑んでいた。

「どうぞ、子ネコちゃん」

おれはスプーンを取ろうとしていた手をとめた。

そいつにとつては些細な冗談だったかもしれない。でもおれにとつて、それはいま最も言つてはいけない言葉だ！

どうした、とこちらを窺う気配がする。おれはキツとそいつをねめつけた。

「おれは、猫、じゃない！」

今日初めて出した声は痰が絡んでとても聞けたものじゃなかったが、男はちゃんと聞きとったようだ。

「……ネコだろう、どう見ても」

「どう見ても人間だ！」

「リン」

なだめるように名前を呼ばれる。まるでおれが聞き分けのないことを言っているみたいだ。

どうして？ おれは当然の主張をしているまでだ。確かにへんてこな耳と尻尾が生えてきたものの、16年間人間として生きてきたんだ、勝手に四足歩行生物扱いされたらたまらない。

「わふっ」

第三の声が沈黙を破った。

「ナーナ」

おれがちゃんと閉めなかった扉を鼻で押して、コリー犬（ただし体格はふつつの1.5倍）が入ってくる。どうやらナーナという名前らしい。

「これは、犬だよな」

男が頷くのを確認して、おれはまくしたてる。

「そうだ、犬っていうのはこういうやつのことを言うんだ。頭に犬耳がついてるからって、それは犬じゃ、ないだろ!？」

「頭に犬耳？ それは……イヌだろう」

「はあっ!？ どっちも犬なのか!？」

おれは逃走劇の引き金となったあの犬耳青年のことを思い出しながら、わかりやすい例だと思って話に出したのだが、あっさりと肯定されてしまう。

犬、犬って……違うだろうよ、彼とこの子は!

「なんだか誤解があるみたいだ。リンの言う犬耳とは、イヌ族のことだろう？ ナーナはただの犬だから、同じではない」

「……イヌ族？」

「リンはネコ……ネコ族だろ？」

「……ネコ族？」

それは転勤族とか暴走族とかと似た何かですか。いや、転勤族と暴走族は似てないけど。

「なにそれ？」

「ネコ族は自分たちのことをそうは呼ばないのか？」

そんなこと言われても。

「……おれはネコ族、とかいうのじゃない」

「じゃあ何なんだ？」

「人間だ」

「……」

結局堂々巡りだ。

どうやら犬とイヌ、猫とネコが別ものであることは分かった。イヌ族やネコ族を「イヌ」「ネコ」と呼びならわすのはまあ、通称というか……省略形なんだろう。わかりにくいつたらありやしない。本当はまだまだ聞きたいこと、聞かなければならないことがたくさんあった。

ここはどこなんだ、なんていう国、日本とどれくらい離れてるの、

なんでみんな日本語しゃべってんの、なんでみんな体が大きいの、それでこの耳は、何。

けれど彼が「冷めるぞ」とスプーンを指して言うので、とりあえず聞くのは一つつきりにしておいた。

「あ、ああ。そういえばまだだったな。エドガー・エインズワース、エドって呼んでくれて構わないよ」

日本語しゃべっても名前は英語風なんだなあ、とそんなことを考えながらおれは何の気なしにスプーンを口に運んで、一口目をすすった。

「……!」

吐き出さなかったおれを、誰か褒めてくれ!

2・ねじ、餌付けされる(3)

まずいわけじゃない。しっかりと鶏の風味がきいていて、野菜も程よく煮込んである。悪くない味だ。むしろおいしい部類。

これが、もっと薄味ならば。

濃い。猛烈に濃い。しょっぱい。塩辛い。海の水よりさらに辛い。おれは一口でジワリと涙が浮いてくるくらいなのに、エドときたら、

「ん、塩が足りなかったか？」

とかふざけたことをぬかして、食卓塩に手を伸ばしてさえいる。

好みの問題とかいう話では到底片付けられないだろう、これ。健康に害が出ておかしくないレベルだ。高血圧？ 脳卒中？ そんな感じの病気にかかりそう。

エドは一振り塩を足したスープをスプーンでぐるぐるかき回して、もう一度口に運び、満足そうにしている。いまさら塩一振りで味が変わるわけがない気がするが、もしかしたら何かおれの勘違いだったか？ 起きたばかりで味覚がマヒしてるとか？ そんな話聞いたことがないけど。

試しにもう一口だけスープを飲んでみることにする。

「……うん」

やっぱり常識を超えたしょっぱさだった。

何も言わずスプーンを置いたおれを、パンをちぎってスープに浸していたエドが見とがめた。

「もう食べないのか？」

「……うん」

おいしそうに食べているエドを見ると、おれのほうがおかしい気がして、なにも言いだせない。

「三日も寝込んだんだから、急には食べられないかもな」

「三日!？」

そうか、そんなに。それならちょっと味覚がおかしくなってもしょうがないかもしれない。きつと今日の晩には直ってるに違いない。気を取り直したおれは、黙ってエドの顔を見ているわけにもいかず、視線を脇に逸らした。足元でナーナが、餌皿からご飯をもらっていた。おれの視線に気がついたのか、理知的な黒い瞳が見上げってくる。なりはやたらデカくて威圧的だけど、こいつに敵意はないんだろう。尻尾がふりふりと揺れていた。カワイイ。……にしても、あの餌もしょっぱいのかな。

下を見たついでに、自分の足も目に入ってくる。椅子が高いせいでちゃんと床についていない足に巻かれている、白い包帯。

「これ、あんたがやってくれた、の」

今さら人見知りがぶり返した。明らかにおれより年上の男に対して、ため口をきくのすら躊躇するような性格なんだ、普段のおれはさつきはちよつと、気が高ぶっていただけで。

「もう痛くないか？」

首肯すると、よかった、と微笑まれた。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

彼の言動は、なにかいちいち、子供を相手にしているみたいだ。

遅い昼食　三日寝込んだ上に、もう今日は半分過ぎていたわけ

だ　を終えたのとちょうどどのタイミングで、カンカンカンと三回、金属同士を打ち付けるような音がした。部屋の外からだ。

「おいエドお。エドガー、いるかあ」

その声に一番初めに反応したのはナーナで、餌を食べ終わってからずつと行儀よくエドの足元にお座りしていたのが、ぱつと部屋の外へ走り出す。

エドは大きいため息をついて立ち上がった。一人取り残されるの

もあれなので、おれも彼らに続く。

キッチン兼ダイニングを出ると、おれがさつき玄関だろうと目を付けた扉が外側に開いていた。逆光で目が慣れず、影しか見えない。「なんだ、こんな時間に。仕事はもうあがりか？」

おれに対していた時とは全然違う、エドの呆れた声がする。それは同時に親しいものへの友好がみてとれた。

「お前が昨日登城したって話を聞いてさ、居ても立ってもいられず」「別に登城したわけじゃない、城内の役場に用があったただけだ」

「そう、それ。聞けばお前」

そこで、影の片方が体を傾げた。家の奥を覗き込むように。

影はずんずんと廊下をこちらに歩いてくる。さほど長い廊下ではないから、おれのいるところまで五歩で、そいつはやってきた。

キッチンの奥に隠れようとしたところを、ひょいと持ち上げられる。またか。おれ、簡単に持ち上げられすぎだろ。

「はなせっ」

高い高いの要領で、おれは男の顔と同じ高さまで引き上げられた。知らない顔だ。エドよりも暗い枯れ草色の金髪と、深い青色の目。

美形だが、甘ったるい顔をしている。エドをアクション映画の主演としたら、こいつは恋愛もの。しかも、コメディ路線の主人公に違いない。二枚目でタラシだが、お軽いせいで数多の女に振られる役どころ。

まあ、おれ目線ではつと見そう見えるっただけで、実際は硬派なやつなのかもしれないよな。引き結ばれた口元と真剣なまなざしはとても軟派には見えない……と思ったのは一瞬。

次の瞬間にはどちらもだらしなく歪んだ。黙っていれば美形ってこういうやつのことをいうのか。

「かーわーいーいっ！」

はっ？ かわいい？ おれが？ そんなこと言われたの、小学校の低学年、親戚のおじさんおばさん以来だ。

「これ、これか！？ おまえが飼いだめたネコっつーのは！」

ぐりぐりと頬ずりされて、いくら美形でも男にそんなことされてもうれしくない！ 逃げようともがくのが精一杯で、そいつがなんか言ってるんだけど、とても耳に入らなかった。

「ちっちゃー！　かわいいー！　黒ネコだ！　目も真っ黒なんだな、珍しー！」

ちょ、テンション、高いし、ずりずり、するの、やめてー！

手をつ張つても頬ずりから解放されず、ちよつと涙目になっているところをずぼつと後ろから引っこ抜かれる。

「嫌がつてるだろう」

エドはすぐにおれを床に降ろしてくれた。ほつと一息。そうやって油断したのが悪かった。

「ねえねえ、尻尾も黒いのか？　どこ尻尾」

ナンパ男は、あろうことかおれのズボンにずぼつと手を入れて！

おれの尻尾を鷲掴みに！

「ひゃあつ」

他人の手に尻尾を触られたせいで変な声が出た。わき腹を撫でられる、もしくは膝小僧を手でぞわつとやられた時みたいなの。

「わー真っ黒ー」

ズボンが落ちないように手でたぐり寄せるので精いっぱいなおれは、のん気な感想を漏らしているそいつの足を思いつきり踏んづけるくらいしか抵抗ができない。

「いたいよネコちゃん」

しかもあんまり効いてない。

「いいかげんにしろ」

「あいてッ」

エドがナンパ男にげんこつを喰らわせたらしい。そのおかげでそいつはおれの尻尾を離し、手を頭にやった。……こいつも見上げるほど背が高い。いちいち首の疲れる連中だ。

「何しに来た、アスター」

「だから、お前のかわいい子ネコちゃんを見にだよー」

アスターと呼ばれた男は頭を擦りながらへらへらと笑った。なんとなくこいつの性格がわかってきたぞ。おれのファーストインプレッションのそのままだ。

エドは再びため息をつき、おれに向き直った。

「……はあ。リン。こいつはローレンスⅡアスター。よろしくしないでいいからな。覚えなくてもいい」

「おい、そんなこと言わなくてもいいじゃないか。……リンちゃんってゆーの？　かわいいでちゅねー、いくつ？」

……なあエド。本当に猫とネコ族は別物なんだよな？　なんかこの軟派男の感じ見てると、おれ、すごく猫扱いされてる気がする。猫っつーか、赤ん坊？

「十六」

「「えっ」」

「十六！」

そこでエドまで驚くのが非常に気に食わない！　こいつらおれのこと何歳だと思ってたわけ！？

「……エドお前、何歳だっけ」

「先月十九になった」

「えっ」

次はおれが驚く番だった。三つしか変わらないのかよ！　もっと、五つ六つは年上なんだと思ってた。

2・ねじ、餌付けされる(4)

女三人集まると姦しいとは言うけれど、男三人でも十分姦しくなる。いや、圧倒的にこの軟派男　アスターのせいな気はするけど。

一度は離れたアスターの手はいつの間にもやらおれの髪やら耳やらをいじくっていて、エドが魔の手から取り返してくれようとはするものの、取り返し取り返され、取り返されたら取り返し、いいかげん大岡裁き待ち状態。越前守役は誰だ。ナーナ、お前でもいいから助けてくれ！

そのナーナといえば、エドの足元で行儀よくお座りをしているけれど、おれたちが遊んでいるとも思ってるのか尻尾をせわしなく振って羨ましそうにしている。助けは望めなさそうだ。

だから、開けっぱなしの玄関からまた違う声がしても、おれはもうどうにでもなれといった雰囲気だった。

「ご主人様！」

ご主人様、ってそれこそそういうカフェにでも行かないと現代日本ではついぞ聞くことのできない呼称だ。一度は呼ばれたいぞ、ご主人様って。いや、この場合は別に羨ましくない。これがかわいい女の子の声だったら是非にお願いしたいが、聞き覚えのない男の声じゃあ……ん？　聞き覚え、ないか？

「ご主人様、探しましたよ、急に仕事場から居なくなられたらしいじゃないですか……あ」

「あ」

一度見たら忘れられない、ゴールデン・レトリバー風の茶金の耳。ふあさりと揺れたふかふかの尻尾。こいつはあの時の

「犬耳！」

「あ、ああ、あの時の……！」

「何だフレド、お前リンちゃんと知り合いだったの？」

アスターが首を傾げる。

知り合いつていうか、そう、忘れちゃいけないのは彼の外見じゃなくて、おれが街中追い回される原因になったってほうだった！

おれは慌てて、隠れる場所を探す。隠れる場所、隠れる場所……

ああ、もうエドの後ろでいいや。

「どうした？」

エドが不思議そうに聞いてくるが、うまく説明することができず、ただ首を振るにとどめる。

「リンちゃん、耳が寝てるー。かわいいー。どうせならエドじゃなくて俺の後ろに隠れてくれればよかったのにー」

おれとエドはほとんど同時にアスターを睨んだ。はいはい、と降参のポーズをしてアスターは引き下がり、代わりに犬耳青年に向き直る。

「おいフレド。俺のかわいいリンちゃんが怯えてるんだけど、お前なんかしたのか？」

「お前の、じゃない」

おお、おれが言いたかったことをエドが代弁してくれた。「かわいい」のほうも否定してくれば満点だったんだけど。

「三日前にちよつと……。でもあれは俺の早とちりもあつてのこと、君を追う命令はもう出ていないから安心してください」

犬耳君は、前半はアスターに、後半はおれに向けてそう言い、最後には頬笑みまで付け加えた。髪と目は茶色なので派手さはないが、彼もまたさわやか系美青年だ。犬耳と犬尻尾はどう考えても余計だけど。しかし、なんだこの街、美形ばかりなのか？

「リンっていうんですか、君。俺はフレデリク。皆にはよくフレドと呼ばれていますから、君もそう呼んでください」

フレドはわざわざ床に膝をつき、おれと同じ目線になるようにして、未だエドの後ろから出てこられないおれに向かって手を伸ばした。それを掴んでいいものか、迷う。

「もう……追っかけてこないか？」

「ええ。あなたはもうエドガーさんのネコになったわけですし」

言っている意味はよくわからないし、さり気なく聞き捨てならぬことを言われた気がする。だけど、いつまでも子供のように隠れているわけにもいかない。おれは彼の手に指先で触れた。フレドは嬉しそうに笑って、つながった手をぶんぶん上下に振る。……握手か、これ？

「うわー、俺、こんな近くでネコ見るの初めてなんです。かわいいなあ……」

フレドは相変わらずにここにこしている。で、この手はいつまでこうしてなきゃいけないんでしょうか？

「主を出し抜いてリンちゃんと仲良くなるとは……フレドお前、なかなかやるな」

「人格の違いだろ、人格の。それよりフレド。お前はアスターを呼びに来たんじゃないのか？」

「ああ、そうでした！」

エドの指摘にフレドはようやく立ち上がった。

「ご主人様。あなた隊長でしょ、隊長がそんなにどうするんですか。部下に示しがつきません。それに、俺にも俺の仕事があるんですよ。今月何回目ですかこうやって勝手にお出かけになられるのはそのたびに探しに行かされる俺の身にもなってください。いいかげんにしていただかないと」

「あーわかった。わかったからお説教はもうヤメテ。リンちゃんがすごいジト目で見てるから」

株が下がる、とか言ってるけど、もともとあんなの株はおれの中で既に底値だから。これ以上下がりようがないからね。

「早く帰れ」

エドがそっけなく付け加えた。

そういえばエドとアスターは一体どういう関係なのだろう。城門の前で槍を持って立っていたフレドは、きっと城勤めの兵隊さんだろうし、彼はアスターのことを「隊長」とも呼んでいた。アスター

もまた城壁の中で仕事をしているのだろうか。

帰り際、家の外からアスターの声がした。

エドは玄関口に立っていて、おれはナーナと一緒に廊下の奥に引っ込んでいたので、二人の声しか聞こえない。

「なあ、お前はいつまでこうしてるつもりなんだ？」

「俺はもうあそこに必要ないだろう？」

「だからって」

「フレドが待つてるぞ」

「……また来るよ」

二人の会話はそこで途絶えた。

ナーナが後ろ脚だけで立ち上がり、器用に前足で扉を開けた。ナーナすげえ。でも自分で扉を開めたりはしないんだろうな。

連れられて入ったのはリビングルームと思しき場所。キッチンもそうだったし、おれが初めに目を覚ました場所もそうだが、広さはおれの家とさして変わらない。流石におれん家に暖炉はないけど。それに、全体的に物が大きめだ。このソファなんておれが横に五人は座れそうだし。

ナーナは暖炉前のカーペットに居場所を作ったみたいだ。

おれが恐る恐るソファに腰を沈めっていると、エドが部屋に入ってくる。もうひとつの一人掛けのソファに疲れたように凭れ込んだ。

「あの」

何が聞きたかった、というわけじゃない。しいて言えば何もかも、だ。

「……ああ。彼らのことかな。アスターはあれでも王都守備隊の隊長だ。フレドは王城警備隊所属。二人とも制服を着てたろ？」

「……王、都」

舌に馴染まないその言葉を、おれは慎重に口に乘せた。おれは、おれが聞きたいのは、そういうことだろうか。

おれたちはそれから、長い長い話をした。

終わったところにはおれはもうくたくたで……体力的にも、精神的にも。

あまりの内容に空腹まで忘れ、その日はもう何もする気にもならず、ソファに丸くなってそのまま夜まで眠ってしまった。

2・ねじ、餌付けされる(5)

薄々そうじゃないかと思うことと、実際にそうだと突き付けられることの間には、思っていたよりも大きな差があったようだ。

おれだってあんなでっかいお城と中世ヨーロッパ的文明レベルを見て、ここがただのテーマパークだとかその辺の外国だとか思ってたわけじゃない。現実的などころで言えばおれの頭がどうになかったか、未だ夢の中にいるか。非現実的などころではタイムスリップとか……いろいろな想像はめぐらせた。ネコ耳とかイヌ耳とか、そのあたりはどうにも説明がつかない気は、していたけど。

彼の告げる国の名前、海の名前、大陸の名前、世界の話。すべてが耳に覚えのないものばかりだ。

「リンはどここの里から来たんだ？」

ネコ族、イヌ族といった半獣の人種は国には属さず、多くは国の外にある「里」と呼ばれるコロニーで生活しているという。

「……おれは人間だよ」

我ながら力のない声だった。

「おれの耳はこんなじゃなかった。尻尾だってなかった。気が付いたらここにいたんだ。どこから来たわけでもない」

エドは曖昧な笑い方をした。多分、おれが言うことが信じられないんだ。そんなの、おれだって同じだ。信じられない。信じたくない。

「でもリンの耳はこれだろう？」

おれの隣でソファが深く沈んだ。エドの手がおれの頭に伸びる。

おれは直前でそれを振り払った。

パシン、と思ったより大きな音がして、怯んだのはおれの方だった。

「……今日はもう休みなさい」

おれはエドがどんな顔をしているかも知らず、彼に背を向けた。

というのが昨日のこと。

一晩寝て起きると、とにかく空腹が洒落にならないレベルで、うじうじ悩んでる場合じゃないってことに気がついた。

昨日のおれの態度を思い出すとちよつと恥ずかしくなる。いちいち他人の手にびくびくして、過剰反応甚だしい。エドはおれに優しくしてくれる人なのに。これじゃあまるで本当に獣になったみたいだ。

エドと顔を合わせるのが気まずくて、どんな顔をしたらいいのかとぼやぼやしていると、扉からエドが顔を出した。

「おはよう。よく眠れた？」

「……おはよ、う。うん、眠れた」

エドはおれがどんな態度を取ろうと変わらない。優しいエドのままだった。おれは無意識にほつと息を吐きだした。

それからエドはまず、おれに湯を使わせた。そついや昨日もそのまま寝ちゃったし、おれ何日体洗ってないんだ？

西洋バスタブ式の、意外と近代的な風呂からあがると、ひどくすつきりした気分だ。やっぱり風呂は良い。脱衣所にはかなり大きめの上下が置いてあった。たぶんこれはエドの。体格差を思い知らされるようでちよつと凹む。下着だけはおれのサイズだったのはよかった。……もしかしてエドが買ってくれたんだろうか。

廊下に出ると、昨日と同じようにキッチンからいい匂いが漂っている。匂いだけはいいんだよなあ、匂いだけは。

「なんであんなにしょっぱいんだろう……」

いやきつと、昨日は味覚が敏感になってただけで、今日は普通に食べれるはず

「……うう」

というわけにはいかなかった。やっぱりしょっぱい。

今朝はサラダとポタージュのスープ、それに黒パン。エドが親切にもドレッシングをかけてくれたおかげで、サラダすらまともに食べられない。ドレッシングのかかっていないところを慎重に選り分けて、そこだけ口に運ぶ。

スープはポタージュだったせいか、昨日よりは塩気が少ない……様な気がする。それでもまだまだ塩辛い。せめてパンだけでも思うのだが、このパン、すげー固い。歯が立たない。エドはナイフで器用にパンをスライスして、スープに浸して食べている。同じようにしようとナイフで格闘していると、なぜかちよつと焦った声で待ったをかけられた。

「俺がやるから……。ほら」

「あ、りがと」

一切れもらった黒パンの厚切りを、端のほうだけスープに浸す。パンにポタージュがじわりと染み込んでふやける。美味しそうだ

見た目だけは。

「……ううう」

パンと一緒になら大丈夫かと思ったけど、やっぱり食べられなかった。おれの味覚は一体どうなっちゃったんだ!?

パンを一口と、サラダを半分しか食べなかったおれを、エドは心配そうな顔で見っていたが、おれは自分のことで精一杯でその表情には気がつかなかった。

それから、おれと食との飽くなき戦いは始まった。

昼前にエドが「出かけてくる」と言って家を出て行った。これはチャンスだ。他人の家を家探するのは気が引けるが、今はかまわてられない。

玄関の外から気配が消えるのを待つて、おれは早速キッチンに向かった。材料はどこに置いてあるんだろう。流石に勝手に火を使うことはできないけど　　というか、このでっかいコンロの使い方が

わからない、何か生で食べられるものくらい……

「ない」

いつの間にかナーナが横にきて、「何やってるの?」という風におれを覗き込んでいる。

「ナーナ、この家の食べ物、どこにあるの?」

「わふっ」

「えっ、おれの言ってることわかったの!」

ついてこい!とばかりに立ち上がったナーナに、おれはちょっとびつくりしながらも後に続く。どこに行くのかと思えば、ナーナはすぐに立ち止まった。食器棚の前で。

一番下の段の、両開きの棚を開けると、そこには……

「うん、そんなことだと思ったけど」

ナーナの餌が入っていましたとき。

昼過ぎにエドが帰ってきたので、おれは思い切って提案してみた。

「あの、昼ご飯、おれが作る……」

「え? リンが?」

大きく頷く。さあ、「頼む」と言ってくれ。おれの食生活が、いや、おれの命がかかっているんだ。

エドは少し考えた後、はっとおれを見て、ぽんぽんと優しく頭を撫でた。

「いいんだよリン。お前は何もしなくて。気を使ってくれてありがとう」

「……え?」

「お前はやさしい子だね」

上機嫌にまな板に向かうエド。……あれ、おれの申し出はどうなつたの?

どうやらエドはおれが居候の身であることを気に病んで、自ら家事の手伝いを申し出たと思ったらしい。ごめんエド! そんな殊勝な心がけから出た言葉じゃないんだ! だからそんな、おれから飯

を奪つようなこと……

「……うう」

そうしておれの昼飯は抜きになりました。

2・ねじ、餌付けされる(6)

エドが昼飯を作る途中、もう一度家探しを決行して材料のある場所は分かった。階段の裏側に地下室があつて、そこに野菜やら何やらを保存しているらしい。冷蔵庫の代わりつてわけか。

午後はエドの目を盗んで、その地下倉庫へ続く蓋を開けてみようとしたんだけど……これが重い。石でできた、あの体の大きなエドが通れるくらいの蓋だ。たたみ半畳くらいある。そりゃあ重いだろうとは思ってたけど、まさか持ち上がらないとは。

「う、うう……」

「大丈夫か、リン」

結局食べ物を見つけることはできず、そればかりかおれはもう動く気力もなくなって、ソファにうつ伏せに倒れこんだ。

昨日のソファは俺が寝転がってもまだ上下に十分余裕がある。そこに半分腰掛けるようにして、エドが俺の顔を覗き込む。ナーナも鼻先だけソファの上に出した。こんな状態なのにカワイイとか思っちゃうおれ。結構余裕あるな。

「どこか具合が悪いのか？ ……薬を飲むにしても、何か食べないとな……。胃に優しいものでも作ろう」

立ち上がろうとするエドの服の裾を掴んで、おれは首を振った。

「……いないのか」

「いら、ない」

「でも、このままじゃ……死んでしまう」

エドの声は悲愴なまでに暗かった。本当に、今にもおれが死んでしまうかのよう。

人間ってそう簡単に死ぬのかな。たしかにご飯は食べれていない。腹が減って動けない。でも一応、水分は補給してるし。サラダも半

分、食べたし。

「リン、リン。俺のことが嫌いかな？」

おれはがんばって顔を上げた。うわ、この人、本当に泣きそうな顔をしている。眉間にしわが寄って、辛そうに細められた目じりにも皺ができて、ああ、美形が台無しだ。

そんな顔して、寄りに寄って聞くことがそれかよ。

思わず笑ってしまった。

「別に、嫌いじゃ、ないよ」

「じゃあなんで、俺の作った食事を食べようとしなない」

「それは……」

食えたもんじゃないから、なんて言ったら、それこそこの人のほうが死んじやいそくだ。

「……小食なんだ」

「嘘をつけ。食事の時いつも耳を寝かせている。それに、喉で唸っていたらう」

聞こえていたのか。それより、おれの知らないところで意思表示していた耳のほうが問題だ。

「本当だよ」

「リン、やっぱりお前」

カンカンカン、と昨日も聞いたドアノックの音がした。

「たーのもーう！」

「ご主人様、ふざけないでください！」

「はいはい、と。おーいエド！ いるんだろ、開けるー！」

アスターとフレッドだ。

リビングに入ってきた二人は、ソファに力なく倒れているおれを見て、やっぱり、と顔を見合わせた。

「そんなこったろうと思った。おーいリンちゃん、だいじょうぶー？ 生きてるかー？」

「なにが……」

「おっと、お前の話は後。リンちゃん起きれるか？ 飯作ってきたけど、食える？」

「リン、大丈夫ですか？ ご主人様も俺も、気がつかなくて済みませんでした……」

アスターが体に触ろうとしたので、それは気力で振り切った。代わりにフレドの手が伸びてくるので、それは甘んじて受けることにする。アスターがむすつと頬を膨らませた。

フレドに体を起こされると、目の前に小さな陶器の鍋があった。蓋を開けると、まだほんのり温かい白い粥のようなものが出てくる。優しい甘い匂いが鼻先をくすぐって、きゅうつ、と腹が鳴る。

だけど、見掛けに騙されちゃいけない。これもきつとすぐくしょっぱいんだ。おれが首を振ると、アスターはもう一度「やっぱりと呟いて、なぜかエドを睨んだ。

「お前がネコの飼い方なんて知ってる訳ないよなあ……」

これ見よがしに、溜息。

「リン、大丈夫、これはあなたも食べられます」

フレドがおれの口の前にスプーンを突き出す。おれは困って、目でエドを探した。おれが誰を探したのかわかったのか、フレドがエドにスプーンを渡す。受け取って一口食べ、エドは目を見開いた。それからもう一匙粥を掬い、今度はおれの口へ運ぶ。

「大丈夫だ。これは、大丈夫だから。……悪かった、リン」

エドやフレド、アスターが、何を言ってるのかわからない。だけど、なぜかおれは、フレドに差し出されても食べようとは思わなかったものを、エドの手からなら食べてもいいかと思ったんだ。また塩辛い味しなくなっても、それでもいいか、って。

「……?!」

でも、それは美味しかった。

程よい塩気と、ミルクの甘み。砂糖も少し入っているみたいで、口の中が幸せになった。

おれがもつと、と口を開くと、エドは文句の一つも言わず、それ

三組の瞳がおれのほうを向く。いや、ナーナも入れれば四組か。

「リン、お前……」

「リンちゃん……」

「リン、君って子は……」

「……カワイイっ……!」

異口同音。

「う、うるさいっ」

トクン、と心臓が跳ねる。……えっ、なんで。

おれは耳をふさぐふりをして、跳ねた心臓の鼓動を必死で抱きしめていた。

男にかわいいって言われたって、いや、女のひとに言われてもビミョーだけど、とにかく嬉しくない。嬉しくなんかはいはずなのにアスターにもフレドにも「カワイイ」って言われたけど、やっぱり全然嬉しくなかった。それなのになんで今回だけこんなにドキドキしてるんだ、おれ!?

「リンちゃん、君の耳はそこじゃないよー」

アスターの言ってることがわかってるのかわかってないのか、ナーナが一拍遅れて「わふっ」と吠えた。

2・ねこ、餌付けされる了

2・ねこ、餌付けされる(6)(後書き)

3話は1/16頃更新予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2000j/>

このこねこのこ

2010年10月15日23時59分発行